

研究論文

「着点」と「起点」が示す 「目的／因果」表現の双方向性 ——「ために」を中心に——

宗田（山梨）安巳

要 旨

日本語の「ために」には、「目的」を表す場合と「原因・理由」を表す場合がある。典型的には、前者は未完了の「る」でマークされ、後者は完了の「た」でマークされる。しかし、前件が「る」でマークされた場合、時には「原因・理由」に解釈される場合もあり、両者の間で「解釈のゆれ」が見られる場合も出てくる。本稿では、「に」が「目的」に向かうという「着点」でマークされて「目的」と解釈される場合と、正反対の「起点」という方向性が読み取られて生まれる「原因・理由」の解釈が、同じ一つの「ために」という表現で表されることについて考察する。時間軸に沿って前件と後件を並べると、「目的」の場合は後件から前件の示す「目的」に向かうという方向であり、「原因・理由」の場合は前件で示されたことが背景化され、そこを起点として後件の事態が生起することを実証していく。

【キーワード】 ために、目的、原因・理由、方向性、背景化

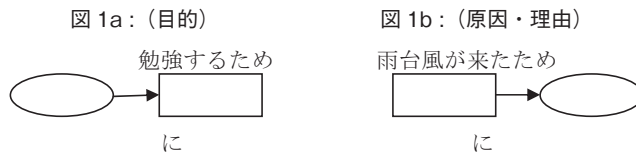
1. はじめに

日本語の「目的」と「原因・理由」表現「ために」についてはこれまでに、現代日本語研究の立場から研究がなされているが、記述的なアプローチからの分類を試みた研究を中心としている。前田（2009: 18, 34）では、「仮定」「確定・既定」に対応する「レアリティー」という語を用い、「目的」は仮説的レアリティー、「原因・理由」は事實的レアリティーに分類し、「目的」では前節に来る意志的動詞の「る」形が「未実現」であるため目的を表すのにふさわしく、「原因・理由」では状態性の強い述語が要求され、それは「事実」と解釈されるからであるなどと述べている。また、日本語教育の現場からの研究もあり、日本語テキストなどにも反映されているが、十分とは言えない。本稿では、「原因・理由」を表す場合の「背景」という概念も視野に入れた、より広い視点からの考察を試みる。

「ために」は、おもに「目的」と「原因・理由」を表す働きがある。典型的には次の例が挙げられる。

- 1 私は音楽を勉強するために、ウィーンへ行きます。
私は音楽の勉強のために、ウィーンへ行きます。
- 2 雨台風が来たために、渡月橋付近は水浸しになった。
雨台風のために、渡月橋付近は水浸しになった。

同じ表現「～ために」が、時には例1のように「音楽を勉強するという目的があって、ウィーンへ行きます」と「目的」に解釈され、また、時には例2のように「雨台風が来たという原因から、渡月橋付近は水浸しになった」と「原因・理由」を表すと解釈される。両者の解釈を図式で示す。「目的」は図1a、「原因・理由」は図1bである。図中の長方形は「前件」を、楕円形は「後件」を表し、矢印は事態・概念の認識の向かう方向を表す。



ここで注目されるのが、両者の矢印の示す方向である。a「目的」の場合は、矢印が後件から前件の「勉強するため」に向かって伸び、「ために」の「に」が目標の到着点（＝着点）と認識される。いっぽうb「原因・理由」の場合は、前件の「雨台風が来た」から後件が示す結果へ矢印が向かい、「ために」の「に」が起因点（＝起点）として捉えられる。

いわゆる格助詞「に」は典型的には着点をマークすることから、「目的」の「ために」が目的の「着点」であることは、十分予想されることである。しかし、「原因・理由」表現においても「に」でマークされ、「ために」が出発の「起点」としても解釈されるのはなぜか。本稿では、筆者の「因果関係」の先行研究（宗田 1991）も取りいれて、考察を進めたい。

2. 「ために」について

ここで取り上げる表現は、時制や主語等を考える必要から「動詞(V)＋ために」に限ることとする。「名詞(N)＋ために」については2.3.1で考察する。また、本稿では「ため」と「ために」を一つの表記「ために」で扱い、「に」のマークの有無に関しては2.3.3で考察する。（なお、例文末の（ ）中のAは朝日新聞、Kは京都新聞、夕は夕刊の略である。）

2.1 「目的」を表す場合

まず、「目的」を表す場合の例を見てみよう。

- 3 （＝1再掲）私は音楽を勉強するために、ウィーンへ行きます。
- 4 （映像作家のFROGMANは…の作者だ。）（…生活のために就職を考え始めた時、）迷いを

- 吹き飛ばしたのが彩さんの一言だった。「新しいことをやるために島根に来たんじゃないの？」(A.2015.9.3)
- 5 あこがれの美女の気を引くために、男は奇策に打って出る。(A.2015.9.6)
- 6 世界では、象牙を取るため毎年約3万頭のアフリカゾウが殺されていると、いられています。(K.2015.9.6)
- 7 歯を健康に保つためには日常のケアが欠かせない。(A.2015.9.1)
- 8 潰されないためには、いい仕事をするしかない。(A.2015.8.30)

なお、例7、例8は「ために・は」と、「は」が後続している。多数の先行研究にも指摘があるように、この表現は「目的」にしか使われないようだ。本稿でも2.1.4で考察したい。

2.1.1 「目的」の場合の動詞について

前件動詞は、未完了形「る」が来ており、「～を勉強する」「～をやる」「(～の気)を引く」「～を取る」「～を保つ」と、他動詞が多く、「意志性」が認められる。なお本稿では、典型的な[+意志性]の行為とは、「[+人間]が行為をなすか否かを自ら決定づけ行動する場合である」とする。例8では、動詞の否定形「ない」がきているが、「潰されない」ことを目指しその目標を実現するという目的を持って、という「意志」が存在する。

後件の動詞はどうであろうか。「行きます」「来た」「(奇策)に打って出る」「する」と、「意志性」が認められる。例6の場合「殺される」ことは主語「アフリカゾウ」の意志ではないが、「人間」が「意志」を持って「殺す」という結果を、主語を「ゾウ」において受身形で表されている。典型的な「目的」表現では後件動詞も[+意志性]であると言えるが、テンス等は、完了、未完了、継続、受身等、多様である。

2.1.2 「目的」の場合の主語について

次に、主語に注目したい。なお、主語や後続助詞が明示されていない場合は $\emptyset$ (ゼロ)表記し、 $\emptyset$ で現れる場合は文脈から予想されるものを筆者が()を付記して表した。

- | | |
|------------------------------------|----------------------|
| 3 私・は－、 $\emptyset$ ～ | ($\emptyset$ = 私) |
| 4 $\emptyset$ (は) －、 $\emptyset$ ～ | ($\emptyset$ = あなた) |
| 5 $\emptyset$ －、男・は～ | ($\emptyset$ = 男) |
| 6 $\emptyset$ (が) －、アフリカゾウ・が～ | ($\emptyset$ = 人) |
| 7 $\emptyset$ (が) －、日常のケア・が～ | ($\emptyset$ = 人) |
| 8 $\emptyset$ －、 $\emptyset$ ～。 | ($\emptyset$ = 私) |

「目的」の場合、前件と後件の主語は同一で、いずれか片方または両方が明示されない場合が多く、前件の主語をX、後件の主語をYと表記すると、次のパターンが多数を占める。

「Xは－、 $\emptyset$ ～」、「 $\emptyset$ －、Yは～」、「 $\emptyset$ －、 $\emptyset$ ～」。また、主語が非同一の例も見られるが少数である。その場合、例6のように、「人」が何らかの目的で後件の行動を起こすことについての描写が多く、その際、後件の動詞が「人」の行為を受けた「受身形」で示され同時に後件主語が前件とは非同

一で「が」でマークされるケースが多く見られる⁽¹⁾。

2.1.3 「目的」の場合の文末表現について

後件・文末のテンス等については2.1.1の「動詞」のところで述べたとおり多様である。文末のモダリティーもかなり自由な形式が許されるようで、「音楽を勉強するために、ウィーンへ行く／行こう／行きたい／行け／行かなければならない／行くつもりだ」など多様である。

2.1.4 「ためには」について

ここでは、「目的」の表現としてだけに使われると見られている「ために・は」、および「ために・も」について考察する。先に挙げた例に少し追加して見てみよう。

- 9 (=7 再掲) 歯を健康に保つためには日常のケアが欠かせない。(A.2015.9.1)
- 10 (=8 再掲) 潰されないためには、いい仕事をするしかない。(A.2015.8.30)
- 11 そんな危険を回避するためには、30年前のプラザ合意のような国際協調が必要かもしれないが、…。(K.2015.9.12)
- 12 議論をするためには用語を厳密に定義し、同じ理解を持たなければならない…。(A.タ.2015.9.3)
- 13 スー・チー氏には、民主主義定着のためにも話し合いで妥協点を探る姿勢が求められる。(A.2015.9.9)

「ためには」「ためにも」の後件にはある傾向が見られる。「欠かせない」、「するしかない」、「必要かもしれない」、「持たなければならない」、「求められる」など、いわゆる、「必要性・重要性がある」、「他の選択肢がない」という意味の表現が後続していることである。この点を検証するために、「目的」の表現として先に挙げた例に当てはめてみよう。

- 14 (=1 再掲) 私は音楽を勉強するために、ウィーンへ行きます。
- 14 a *私は、音楽を勉強するために・は、ウィーンへ行きます。
- b 私は、音楽を勉強するために・は、ウィーンへ行かなければなりません。
- 私は、音楽を勉強するために・は、ウィーンへ行くしかありません。

「ためには」の場合、「行きます」のままでは不適格な文になってしまい例14aでは「*」が付くが、14bのように「必要性」や「他の選択肢がない」表現の「なければならない」、「しかない」が後続すると、適格な文となる⁽²⁾。

ここで、形式は同じであるが、後続の「は」が「否定」時につく場合や対比の「Aは～、Bは～」の場合についても触れておきたい。前例の「ためには」とは異なり、後件の動詞には前述のような制限は適用されない。

- 15 つまらないテレビを見るためには、貴重な時間を使いたくない。
- 16 独立を果たすためには命をかけたが、侵略のためには争わなかった。

2.1.5 「目的」の場合の考察のまとめ

典型的な「目的」の例での考察をまとめると、次のようになる。

- 1) 前件動詞：未完了の「る」で（否定の「ない」も含め）、[＋意志性]
- 2) 主語：前件・後件で同一が多数で、「Xはー、0～」 「0ー、Yは～」 「0ー、0～」
（前件・後件で非同一の「Xがー、Yが～」は少数）
- 3) 後件・文末のテンス等やモダリティー：後件動詞は完了の「た」、未完了の「る」継続の「ている」、否定「ない」・受身の「られる」など多様、モダリティーもかなり自由で多様。
- 4) その他：「ために・は／も」は、主に「目的」表現のみで、後件に「必要性・重要性がある」、「他の選択肢がない」などを意味する表現が後続する。

2.2 「原因・理由」を表す場合

次に、「原因・理由」を表す場合について考察を進める。

- 17 (=2 再掲) 雨台風が来たために、渡月橋付近は水浸しになった。
- 18 太陽光発電が急速に普及したため、今夏の電力需給は、原発がなくても安定していた。
(A.2015.9.3)
- 19 消防団員については府と市で訓練内容が異なるため、今後もそれぞれが担う。(A.2015.9.9)
- 20 同社は、…不動産の保有件数を…約 400 件に増やす目標を掲げ、「リースバック事業は安定した賃料収入が見込めるため、新たな収益事業として育てたい」(広報担当)としている。
(K.2015.9.3)
- 21 トイレットペーパーにも困りそうだ。国内生産の約 4 割が…静岡県内でつくられているため、東海地震が起きると…供給が滞ると予想されている。(A.2015.8.29)
- 22 …非常食は…高台にある施設に保管してあるため、市職員が取りに行けず、自衛隊に相談している。(A. 夕 .2015.9.11)
- 23 共和党議員だけでは 3 分の 2 に達しないため、民主党議員の動向が鍵を握る。
(A. 夕 .2015.9.3)

2.2.1 「原因・理由」の場合の動詞について

前件動詞は、完了の「た」または未完了の「る」である。未完了の場合は「ている」「である」「ない」「異なる」など状態を示すものとなっている。「意志性」について言えば、自動詞または他動詞の可能形、受身形となっており「ている」「である」と合わせて、「目的」表現に見られるような意志性は存在しない。

後件動詞は完了「た」または未完了「る」で、「になった」「安定していた」「滞る」「取りに行けず」「動向が鍵を握る」などと[－意志性]と見られる。例 19「担う」、例 20「育てたい」では動詞自体には意志性が認められるが、動詞の前後を見ると、例 19 において主語は「それぞれ（ここでは府と市）」であり[－人間]の主語であることから、[－意志性]として扱うことができる。例 20 については、2.2.3「文末表現について」で考えてみる。

2.2.2 「原因・理由」の場合の主語について

主語とそれに続く助詞を見てみよう。主語と後続助詞が明示されず $\emptyset$ で出る場合のほとんどが、直前に「～は／が」表示があり一文からの推察が可能である。しかし、全く $\emptyset$ の場合もあり、その例文については文脈から推測されるものを（ ）で括って筆者が補った。

- 17 雨台風・が $\sim$ 、渡月橋付近・は $\sim$ 。
- 18 太陽光発電・が $\sim$ 、今夏の電力需要・は $\sim$ 。
- 19 訓練内容・が $\sim$ 、それぞれ・が $\sim$ 。
- 20 (同社は、 $\sim$) 賃料収入・が $\sim$ 、 $\emptyset$ (は) $\sim$ ($\emptyset$ = 同社)
- 21 約4割・が $\sim$ 、 $\sim$ 供給・が $\sim$
- 22 非常食・は $\sim$ 、市職員・が $\sim$
- 23 $\emptyset$ (が) $\sim$ 、動向・が $\sim$ 。 ($\emptyset$ = 票)

主語は、前件と後件では非同一であり、次のように2つのタイプにまとめられる。

I : 「X が $\sim$ 、Y が $\sim$ 」、II : 「X が $\sim$ 、Y は $\sim$ 」

例20の場合、直前の「は」がYに及ぶと解釈される。例22については、「非常食」について特別に注目され取り上げられているため「は」でマークされているが、通常Iのグループに入れられるものと考えられる。

2.2.3 「原因・理由」の文末表現について

後件の動詞については2.2.1で見たとおりである。完了「た」あるいは未完了「る」で状態の継続や変化の「ている」「になる」、否定の「ず」や状態動詞が来るなど、典型的な「原因・理由」の場合は[－意志性]が多数である。

ただし、例20では希望の意志表示「V・たい」が後件に来ており、「解釈のゆれ」とも関連することであるが、ここでも少し触れておく。前件動詞が可能形の「見込める」である場合、「～が見込めるため」の解釈は「目的」ではなく「原因・理由」となる。「～が見込める」が「目的」を表すには「(見込める)・ように」と別の表現形式をとらなければならない。前件動詞に「意志性」がない場合は「ために」を使うことはできず、「ように」が後続して「目的」が表わされることになる。例20の場合、後件動詞に「育てたい」と会社の方針を表明する[＋意志性]が見られるにも関わらず「原因・理由」の解釈となるのは、前件が[－意志性]のV+「ために」が来て、後件は主語が非同一「X が $\sim$ 、Y は $\sim$ 」で形式上は[－人間]であることなどの複合的な要因が考えられる。さらなる考察は2.3節「解釈のゆれ」に譲りたい。文末モダリティは「目的」表現の場合ほどの広がりは見られない。

2.2.4 「原因・理由」の場合の考察のまとめ

まとめとして、「ために」が典型的な「原因・理由」を表す場合の特徴を挙げておく。

- 1) 前件動詞：完了「た」または未完了「る」であり、未完了の場合「ている／である／ない／異なる」など「状態」を表す。自動詞、他動詞の可能形・受身形で[－意志性]。
- 2) 主語：前件・後件が非同一で、「Xがー、Yがー」「Xがー、Yはー」
- 3) 後件・文末のテンス等やモダリティー：完了「た」または未完了「る」で状態の継続・変化の「ている／になる」、否定の「ず」や状態動詞が来るなど[－意志性]が多数。また、文末モダリティーは「目的」ほどの広がりはない。
- 4) その他：前件には状態を示す「形容詞」が来うる⁽³⁾。

2.3 「目的」と「原因・理由」との「解釈のゆれ」の場合

前節までに見た例は、「典型的」いわゆる「プロトタイプ」の「目的」と「原因・理由」の例であった。「ために」はこのように二つの解釈がなされるということでは二義性であると言える。しかし、全く同一の表現でありながらどちらの意味にもとれ、解釈がゆれる例もある。「目的」あるいは「原因・理由」を決定する因子はこれまでに見てきたとおり[－／＋完了](＝ル／タ)、[＋／－状態性](＝ている・ある等)、[＋／－意志性]他がある。プロトタイプの「目的」は[－完了・－状態・＋意志]であり、「原因・理由」は[＋完了、＋状態性、－意志]である。解釈がゆれる例は、いわば両極にあるプロトタイプの「目的」「原因・理由」が持つこれらの決定因子がより少なく、よってプロトタイプから離れ両極のはざまに位置し解釈が二義の間で曖昧となりいわゆる「家族的類似性」を有する例となる。次の2.3.1では上記の因子他を手掛かりに、「解釈のゆれ」の例を考察する。まず「N(名詞)のために」の場合、次に「V(動詞)のために」の場合について考える。

2.3.1 「Nのために」

「Nのために」の表現には、テンス等が明示されないために「解釈のゆれ」が生まれる。以下、3つのタイプを取り上げて考察する。

1) 「スル」のか「シタ」のか

24 20年ぶりのパーティーのために、旧友が大勢集まった

例24では「パーティー」がこれから「開く」のか既に「開かれた」ものなのか特定されない。よって、次のような「解釈のゆれ」が生じる。

24a 20年ぶりのパーティーを開くために、旧友が大勢集まった。(目的)

b 20年ぶりのパーティーを開いたために、旧友が大勢集まった。(原因・理由)

例24aでは、たとえば「パーティーを近々開くその用意のために集まった」と「目的」に解釈される。いっぽう、例24bでは、「パーティーが開かれたので、その時には大勢が集まった」と「原因・理由」の解釈がなされる。前節でまとめたとおり、典型的な「目的」表現では前件が「未完了」の「る」、「原因・結果」表現では「完了」の「た」でマークされることが両者識別の一つの要因である。「Nのために」の表現ではテンス等が明示されず、よって「解釈のゆれ」が生じることになる。

「ゆれ」を解消するためには、「名詞」を「動詞化」して、「スル」のか「シタ」のかを明示する

必要がある。

2) 「スル」のか「サレタ」のか

「解釈のゆれ」の一因が「文脈」に関与している場合も多い。例 25 を見てみよう。

- 25 …、生麺に近づける工夫が広がる。製造ライン短縮のため、カップ麺は縮れた短い麺を使うことが多いが、最近の日本そばはストレートタイプが使われるようになった。
(A.2015.8.29)

例 25 の場合は文末に「最近の日本そばはストレートタイプが使われるようになった」とあり、「縮れた麺」は「好まれなくなったので」という読み込みもできる。よって、前件が「製造ラインが短縮される」と主語が[－人間]の受身形の[－意志性]で、「製造ラインが短縮されたせいで(麺は短い縮れた麺を使っている)」と「原因・理由」として読まれる可能性が出てくる。もちろん、「(「人」が[＋意志性]で)工場生産の効率を高めるための工夫として、)ラインを短縮するために」という「目的」の解釈もできる。前後の文脈がこのように解釈に影響するのは当然である。「名詞」を「動詞化」し、意志性の[＋／－]を表す動詞のヴォイスを明示することで明確な解釈が得られる。

- 25 a 製造ラインを短縮するため、カップ麺は縮れた短い麺を使うことが多い。(目的)
b 製造ラインが短縮されたため、カップ麺は縮れた短い麺を使うことが多い。(原因・理由)

3) 「スル」のか「シテイル」のか

- 26 暑い盛りの8月に生まれた長男。授乳のために大きくなった乳房の間に、ひどいあせもができた。(A.2015.9.4)

例 26 では「授乳する」ことが目的でそのために「乳房が大きくなる」という生物学的な背景知識が「目的」の解釈につながる。つまり、授乳を始める前からその準備のために大きくなった、ということである。また、そこには人間の「意志」で乳房を大きく「する」ことはできないという背景知識もあり、前件は名詞だけで動詞がなく、後件に「なった」という[－意志性]の動詞が来ても、「目的」としての解釈が生み出されることになる。

いっぽう、「子供が生まれれば授乳は毎日続くものである」という一般的な常識が働いて「授乳している」ことが「大きくなった」ことにつながるという「原因・理由」の解釈も出てくる。文脈や背景知識を受けて解釈がゆれるが、次の例では両者のゆれが軽減される。

- 26 a 授乳するために大きくなった乳房の間に、ひどいあせもができた。(目的)
b 授乳しているために大きくなった乳房の間に、ひどいあせもができた。(原因・理由)

4) 「スル」のか「アル」のか

動詞の「テンス／アスペクト／ヴォイス」や「文脈」「背景知識」の他に、同じ「未完了」の「る」でも動詞自体が持つ「状態性」の有無が、「ゆれ」に関係する場合もある。

27 JR 西日本の発表によると、5連休のために予約が殺到しているという。

「5連休(だ)」という名詞表現には二つの解釈がある。一つは、「5日間連続して休む」という解釈と、もう一つは「5日間連続して休みの日がある」という解釈である。

前者の解釈は、「5日連続(の休日をつくり)「休む」ための「目的」で、(予約を一杯一杯入れる人達の)予約が殺到している」という「目的」の解釈である。そこには前件の「休む」という未完了の「る」および「人がする」という目的のための[+意志性]が見られる。

後者においては、「(普段めったにない)5日間も連続する休日が「ある」ため、予約が殺到している」と「原因・理由」の解釈がなされる。前件の「ある」という状態を示す動詞が、[-人間]の「連休」という主語に続いており、後件には、前件と非同一の[-人間]の主語「予約が」が来て、「殺到している」と状態を表す[-意志性]の動詞が続く。これらは2.2.4「原因・理由」の場合の考察のまとめで示した特徴、つまり、前件が「状態の動詞」で、主語が非同一で「Xがー、Yがー」、前件・後件動詞が[-意志性]であるという特徴に合致している。この例の「解釈のゆれ」は、「5連休をつくり休むため」または「5連休があるため」と、「スル」のか「アル」のかを動詞で明示化することによって軽減できる。

2.3.2 「Vために」

前件動詞が完了「た」の場合の解釈は「原因・理由」に限られるが、未完了「る」の場合は「目的」の他に「原因・理由」の場合もあり、解釈がゆれる例がある。前節までの考察の結果得られた両解釈の決定因子である[+/-状態][+/-意志性]に加えて、ここでは[+/-既定]という観点も考慮して、「解釈のゆれ」について4つのタイプを取り上げて考える。

1) 「未完了・スル」が[-既定]の「スル」か[+既定]の「スル」か

ここでの考察の対象は、「る」でマークされる未実現の「未完了」事態のうち、過去のある時点から認識としては既定のこと／事態(属性・性情などの状態を含む)を[+既定]と捉えた場合と、そうではなく発話時がこと／事態の認識時点であり[-既定]と捉えた場合との両者間での「原因・理由」と「目的」との解釈のゆれである⁽⁴⁾。

28 9時から水道工事をするため、周辺地域は断水します。

例28の場合、一つは「9時から水道工事をする(目的の)ために、(今から水を止める必要があり)周辺地域を断水します。」という例えば工事実施側の「目的」の解釈となる。

また、視点を変えれば、別の解釈も成り立つ。つまり、「(今日の水道工事は予定が決まっている事であり[+既定])水道工事をする(という「理由」の)ため、(今日はこちらの)周辺地域は断水します(という事態になるんです)。という例えば周辺住民による「原因・理由」の解釈である。

同じ「スル」という動詞であっても、これから実現すべき[+意志性]の「未完了」事態か、あるいは文脈から「既定」のことと解釈され[-意志性]の状況を示すと捉えられるかで「ゆれ」

が生じる。動詞の「る」が文字通り表面的な未完了という意味だけではなく、そこに読み取られる概念上の[+既定]という性質が解釈に関わることを忘れてはならない。

2) 「スル」のか「シテイル」のか

- 29 レスボス島の収容施設に着いたニスマさんは、持っていた太陽光発電機でスマートフォンの充電を始めた。どのルートが安全か。仲間と情報交換するため、携帯電話は欠かせない。(A.2015.9.9)

例 29 の場合、文字通り「情報交換する（ことを「目的」とする）ため、携帯電話は欠かせない」と「目的」の解釈が取られる。ここではニスマさん[+人間]が、[+意志性]で「(情報交換)する」という「目的」が語られている。

いっぽうで、文脈から次のような解釈も可能である。前文には「ニスマさんは、持っていた太陽光発電機でスマートフォンの充電を始めた。」とある。そのことから、スマートフォンは頻繁に使っている物であり、仲間との情報交換が日常的であることが推察され、「(常に) 仲間と情報交換する（している事情＝「理由」がある）ため、携帯電話は欠かせない」という「原因・理由」の解釈もできる。ここでは、典型的な「原因・理由」の特徴である前件動詞が「状態」を表していることが、その解釈につながっている。

このような場合の「解釈のゆれ」解消のためには、後件の「欠かせない」とも呼応する「ためには」の表現が適当と考えられる。「ためには」は、先に述べたように「目的」表現にのみ見られるものである。あわせて「原因・理由」の場合は、テンスをより細かく明示して、「ている」表現をとるのが適切である。

- 29 a 仲間と情報交換するためには、携帯電話は欠かせない。(目的)

- b 仲間と情報交換しているため、携帯電話は欠かせない。(原因・理由)

- 30 原材料をほぼ無添加にするため経費は膨らむ（が、自動化設備を導入するなどして収益性を高めている）。(K.2015.9.7)

例 30 の場合、「(原材料) を（無添加）にする」という動詞の未完了形「する」が、主語の「人」が商品を作る際に「意志」を持って目指す「目的」の行為である場合、「目的」の解釈となる。

いっぽう、主語は前件と後件では非同一であり、「0 (= X が) -、Y は～」という形をとっており、これは典型的な「原因・理由」表現の標識であるため、二つめの解釈が生まれ、「解釈のゆれ」にもつながることになる。前件に「する」という他動詞が来てもその主語が明示されていない場合、「意志性」が不明瞭で「ゆれ」の可能性が高まる。「原材料をほぼ無添加にして、(商品を作っている)」ということが原因・理由となって、それで「経費が膨らむ」という「原因・理由」の解釈が取られる。このような例の「解釈のゆれ」の解消法としては、一つは前件動詞を「ている」と「状態性」を明示する方法、あるいは「受身」形で提示する方法がある。「受身」形になることで主語が[－人間]で同時に行為の[－意志性]が明示され、「原因・結果」の解釈が容易になる。

- 30 a 原材料をほぼ無添加にするために、経費は膨らむ (が、…)。(目的)
 b 原材料をほぼ無添加にしているため、経費は膨らむ (が、…)。(原因・結果)
 b' 原材料がほぼ無添加にされているため、経費は膨らむ (が、…)。(原因・結果)

3) [+意志性]の「スル」か[-意志性]の「スル」か

31 夫の酒代を支払うため、これまでかなり大金をはらってきた。

例 31 では前件の動詞「支払う」と後件の「大金をはらう」に「主語」の妻である「私」の「意志」を認めるか否かが、「目的」と「原因・理由」の解釈を左右する。

夫がお酒を飲むことを好ましくないと妻が思っている場合、「酒代を支払う」ことに積極的な意志はない[-意志性]と言える。「(酒代にお金を使いたくないが払わなければならないという理由があって) 酒代を支払うために、これまでかなり大金をはらってきた」という「原因・理由」の解釈が成り立つ。後件にある「これまで(はらっ)てきた」という恒常の状態が文全体の解釈に及んで、前件が「夫の飲酒は常態化している」とみなされ、「酒代を支払う」ことも長年にわたって続いていることが推察される。よって、前件は[-意志性]で「継続的」と解釈され、「原因・理由」の特徴に合致することから、「原因・理由」の解釈に至る。

いっぽう、「夫のお酒」についての妻側の不快な感情が特にない場合は、通常「目的」としての事実描写の解釈がなされる。つまり、「酒代を支払う(ことにお金を使う目的があってその目的のために、大金をはらってきた)」との解釈である。妻の納得した「支払う」行為は[+意志性]であり、また主語が前件・後件で同一であることが、「目的」の解釈を支えていると考えられる。

- 31 a 夫の酒代を支払うために、これまでかなり大金をはらってきた。(目的)
 b 夫の酒代を支払わなければならないため、これまでかなり大金をはらってきた。(原因・理由)

典型的な「原因・理由」表現の場合、「主語」が[-意志性]であるため、「好ましくない状況」例えば、事故や災害などの状況報告の場面で次のように多用されることにつながる。

32 本日は大雪／強風／踏切事故のため、列車は1時間の遅れとなっております。

4) 後件の「Nだ」が[+意志性]か[-意志性]か

後件が名詞である場合も見えておく。名詞の場合は、意志についての明示が期待できない。「Nだ」をどう捉えるか、「意志性」をどう見るか、考えてみる。

33 お弁当を作るため、朝は5時起きだ。

例 33 では前件・後件ともに主語は「私」で「同一」であり、「お弁当を作る」ことが前向きの行為の場合[+意志]と捉えられ、「目的」の解釈となる。後件の「5時起きだ」は「5時に起きるぞ」という積極的な[+意志]の表明となる。

いっぽう、「お弁当を作る」ことが「作らなければならない」という義務的な仕事であり、そのために「5時という早朝に起きなければならないはめになる」と捉えられた場合は、「5時起きだ」は[－意志]の表現となり、「原因・理由」と解釈される。前件の動詞が状態性を帯び、さらに後件が「動詞化」されモダリティーが付加されると、「原因・理由」の解釈がより鮮明となる。

33 a お弁当を作るために、明日の朝は5時に起きよう。(目的)

b 毎日お弁当を作っているため、朝は5時に起きなければならない。(原因・理由)

2.3.3 「ために」の「に」について

本節では「ために」の「に」にどのような存在意義があるかを考えてみる。

1) 「ために・N」の名詞修飾の場合

まず、「[ために]+V+N」の例を見てみよう。

34 a 番組では…、副業の利点や、リスクを小さくするために気にすべき項目をわかりやすく解説する。(A.2015.9.7)

b 番組では…、副業の利点や、リスクを小さくするため気にすべき項目をわかりやすく解説する。

a「ために」のほうがb「ため」の場合より「気にすべき」とのつながりが強いと感じられ、名詞「項目」の修飾として安定するようだ。34 bの場合は「リスクを小さくするため」が「気にすべき項目」を飛び越えて、「わかりやすく解説する」にかかっていくとの解釈もなされる可能性が高まる。「(リスクを小さく)する」という[+意志性]の後の「ため」が「目的」と取られ、文末にある「解説する」につながりやすいと考えられる。「ために」の場合は直後の「気にすべき」とつなぐ力があり、「リスクを小さくするために気にすべき項目」と名詞修飾構造を理解することが容易になる。「に」につなぐ働きがあり、名詞修飾の場合「に」はほぼ必須のものと言える。

続いて「ために+(形容詞) adj.+N」の例も見ておく。

35 京都市以外にも東京都と仙台市が候補に挙がり、海外からの参加者に日本の文化や歴史を知ってもらうためにふさわしい場所として選ばれた。(K.2015.9.3)

例35の場合、「～にふさわしい」でふさわしい対象をマークしており、「に」は必須のマーカーとなる。「ために」に後続する形容詞にはこの種のものが多い。

2) 決意表明の「ために」

次のように「目的」(あるいは少数であろうが「原因」)をより明確に示すためにも、「に」の存在理由があると思われる。

36 中でも高齢の男性被爆者の方が、「私は、核兵器のない世界の実現のために、これからも、

生命ある限り、…語り続けます」と決意を示され、…。(A.2015.9.7)

- 37 …幸四郎は「あるがままの人生に折り合いをつけるのではなく、あるべき姿のために戦おうというのがテーマ」と語る。(A.タ.2015.9.2)

上例では「ために」と「に」でマークされたほうが「目的」が明瞭に伝わる。「ため」がより文語的であるようだが、特に口頭での決意表明時は「ために」が適切であろう⁽⁵⁾。

3.「原因・理由」表現の「P-て、Q」と「ために」

本節では、筆者の先行研究(宗田 1991)である継起表現「P-て、Q」が「因果関係」を表す場合と、本稿で考察対象の「原因・理由」表現「ために」の比較検討を試みる。

3.1 「P-て、Q」と「ために」

本節で「て」と表記されるのはいわゆる動詞の「て形」である。前件と後件が動詞「て形」でつながれた場合の継起表現「P-て、Q」は、「継起」した2つの事態PとQを並べ、時にはそこに「因果関係」が読み取られる。本稿では「ために」が「原因・理由」を表わす場合についての考察を進めてきたが、それが「P-て、Q」の「原因・理由」表現の考察の結果得た特徴と共通する点があることを示す。

3.1.1 前件動詞の「テンス／アスペクト」について

「ために」と「て」との決定的な違いの一つは、前件に動詞の「テンス」が明示されるか否かにある。

- 38 雨台風が来て、渡月橋付近は水浸しになった。

- 39 (=2 再掲) 雨台風が来たために、渡月橋付近は水浸しになった。

例 38 では後件の動詞「水浸しになった」と「た」でマークされているので、前件も「来て」は過去の事態であることは、「て」が「継起」の表現ということから理解できるが、前件自体はテンスは明示されない。

例 39 では「ために」の前に前件の動詞が「た」でマークされており、前件の事態が「完了」であることが示されている。「前件」の事態が「原因・理由」となって、「後件」の事態が発生したと、「因果関係」が示される。「た」が明示されるため、「V た・ために」は常に「原因・理由」表現として理解されることが、「て」の場合との一つの相違点である。しかし、前件動詞が未完了「る」の場合でも「原因・理由」を表す場合があり、それが、「目的」の解釈との「ゆれ」を引き起こすことにもなる。「ゆれの解釈」で両者の違いを決定づける要因については考察してきたとおりであるが、その要因が、「て」が単なる「継起」表現となるか「原因・理由」表現となるかの弁別的な特徴にも共通することを示す。

「V る・ために」が「原因・理由」を表す場合の特徴として、前件動詞が「状態性」「恒常性」「内容の既定の事態」を示すものであることは 2.3.2 で指摘したとおりである。つまり、「ている／て

ある／ない」「ある／異なる」などがそれである。この前件動詞の「状態性」という特徴が、次に紹介する「て」の「因果表現」にも見られる。

40 a ナイフを使って、手を切った。

b ナイフを使っていて、手を切った。

41 a 硬球を投げて、窓ガラスを割った。

b 硬球を投げていて、窓ガラスを割った。

例 40 と例 41 の a では「ナイフ／硬球を道具として、後件の示す行為をした」と解釈される。いっぽう b では「使っていた／投げていた・から」と「原因・理由」が読み取られる。「て」も「ために」も、前件の動詞が「ている」などの「状態」を表す場合に「原因・理由」の解釈が生まれるということと共通している。(宗田 2006: 第 3 節参照)

3.1.2 「主語」について

「ために」が「原因・理由」を表す場合、主語の取り方にも傾向があった。前件と後件の主語が非同一であり、「X がー、Y は～」または「X がー、Y が～」というパターンで助詞が後続していることだ。「て」の「因果表現」の場合でも同様の指摘がなされた。主語が非同一の場合、「X が、Y は」または「(Y は～) X が、Ø」というパターンが多いという傾向である。(この点に関しては宗田 (1991:134) を参照⁽⁶⁾)

42 太郎が来て、花子はほっとした。

43 花子は、太郎が来て、ほっとした。

宗田 (1991: 139) では「て」の「継起」表現と「因果」表現との考察であったので両者での特徴の差が意識されている。「継起」表現 (例えば「花子のご飯を食べて帰った」) の特徴として、同一主語を取ること (95%)、そのほとんど (70%) が「動作主格」で「+意志性」であり、述語動詞が前件・後件ともにパーフェクト (「完了」) であるという特徴を持つことから、「継起」表現には「前景」という性格があると結論づけている。いっぽう、「て」の因果表現の場合は「背景」という性格を持つと指摘した。「因果表現」が持つこの「背景」は、「て」のみならず、「ために」が「原因・理由」と解釈される場合においても持つ性質であると思われる。次節で考察する。

3.1.3 「背景」と「原因・理由」表現

本稿で考察してきた「ために」、および筆者の先行研究「P て、Q」における「原因・理由表現」での考察の結果、両者が共通した特徴を持つことがわかった。一つは、前件動詞が持つ「状態性」が「原因・理由」の解釈に関わることであり、二つ目は、前件と後件の主語が非同一であり、その後続助詞の取り方が「X が、Y は」(「ために」では「X が Y が」も) とかなりの割合でパターン化されているという特徴である。これらの特徴は前件に「背景」という性質があることを意味する。ここで「背景」についての先行研究を見ておく。

Hopper (1979)、および Hopper & Thompson (1980) では物語における「前景」(Foreground) の文と「背

景」(Background)の文の特徴づけとしていくつかの要因を挙げている。その中で、本稿の「原因・理由」表現の考察に関わる、前件が持つ「背景」という性質に関連する要因として、おもに1)「状態性」、2)動詞の前にくる「新情報」、3)「名詞化」が挙げられる。以下で1)から3)について、考えていきたい。なお、「前景」の文とは「話の筋を前進させる」文であり、「背景」の文とは「話の筋は展開しないで状況を説明する」文と述べられており、そこでは物語のディスコースの観察から考察された「背景」の概念であるので「背景」を示すのは「文」である。本稿では、「て」、「ために」の「前件」の「節」または「名詞(句)」が持つ「背景」の概念となる⁽⁷⁾。

1)「状態性」について

本稿では、「ために」の前件動詞が「た」または「る」マークで「既定事態」を示す場合や「状態性」「恒常性」を示す場合に、「原因・理由」と解釈されることを主に2.3節の「解釈のゆれ」で見てきた。また、「て」でも「ナイフを使っている」などの例のように状態を示す「ている」の場合、「原因・理由」に解釈されることも示した。

Hopper (1979)、Hopper & Thompson (1980)では「背景」の文には「動詞の継続、状態、反復的、インパーフェクトで同時的」という性質があるとしており、よって、「ために」・「て」の「因果表現」における前件動詞の「状態性」は「背景」と捉えられる一つの因子となる。

2)「主語」と後続「助詞」について

典型的な「原因・理由」の「ために」の場合、前件・後件の「主語」が非同一で「Xが、Yは」または「Xが、Yが」のパターンで助詞がマークされ、また「て」の場合も、非同一主語の場合「Xが、Yは」または「(Yは)Xが、 $\emptyset$ 」となり、両者は類似している。

Hopper (1979)、Hopper & Thompson (1980)で「背景」の文の特徴として、「話題の転換、新情報を動詞前に置く」、「話題は多様で自然現象を含む」とある。「新情報」は日本語では「が」でマークされる。日本語の「原因・理由」の「ために」や「て」の前件主語が「が」でマークされることから、これらの「前件」は「背景」という性質を持つと言える。

3)「名詞化」について

Hopper (1979)、Hopper & Thompson (1980)は、「名詞化」の場合も「背景」となることを指摘している。この点についても「ために」と「て」に当てはまる。

「ために」の前件動詞は「サ変動詞」も多く、容易に動詞が「名詞化」される。それ以外の動詞の場合でも「名詞化」され「Nのために」という表現がとれる。また、「て」の場合も、「ナイフを使っている(手を切った)」は「ナイフで(手を切った)」と言えることから、前件は「N+助詞(で)」という形で「名詞化」されることになる。以上のことから、「ために」と「て」の「原因・理由」を示す前件には、「背景」という性質があると言える。

以上1)～3)で、「ために」と「て」の「原因・理由」を示す前件には、「背景」という性質があることを示した。

3.2 「Nのために」について

ここで、前節の3)「名詞化」とも関連する「Nのために」について、見ておく。

{ 愛妻のために—子供のために—あなたのために—宿六のために—飲んだくれのために }

上の一連の「Nのために」という表現に続く後件の文が、例えば「料亭から会席料理を取り寄せた」であるとしよう。その解釈は、「愛妻のため」ならば「(積極的に自分の意志を持って高額であろう料理を) 取り寄せた」となり、「飲んだくれのため」の場合は「(自分の積極的な意志ではないが、例えば、頼まれて仕方がないので) 取り寄せ(るはめになってしまっ) た」という解釈が可能ではないだろうか。そこには(愛妻を喜ばせる)「目的」があり、いっぽうでは、(仕方がないので)「理由」がある。

「(はめになっ) てしまった」という表現は、「点的」で「パーフェクト(完了)」性を持つと言えるが、この性質が「因果表現」に関係することを宗田(1991: 139)で述べた。「因果表現」では、後件に「点的」、「パーフェクト」性が示され、前件では「ていて」や「てあって」などで「継続的、インパーフェクト」性が示されるという指摘である。「愛妻のため」では「目的」に向かって行く方向性を、「飲んだくれのため」にはその事情を踏まえてとの「背景」という場を感じるが、これは話の筋を前進させる「前景」や状況を説明する「背景」と関連があるのではないだろうか。この点に関しては、さらに次節で考察する。

4. 「る」と「た」が示す方向性について

本稿の「1. はじめに」では、「ために」という同じ一つの表現が、「目的」と「原因・理由」を表す場合にそれぞれ両者の向かう方向が逆になるのはなぜか、という疑問を(図1)を描いて提示した。「目的」の場合は「それに向かって」と「目的」はいわば「着点」であり、「原因・理由」は「そこから次の事態が起きた」という「起点」が示され、方向が逆と捉えられたのである。

多くの先行研究で、「に」は「着点」、「起点」とともに表されると言及されている。「着点」は「私は東京に行く」などの場合であり、「起点」は授受表現の「友達に花をもらった」などの場合である。「友達に」は「起点」の「から」でもマークされ得て「友達からもらった」とも言える。よって、この場合の「に」は「起点」を表すという説明がなされている。

しかし、「ために」は「ためから」とは言い換えられない。では「ために」の「原因・理由」表現での「起点」という見方は、どう捉えればよいのか。元来「着点」と「起点」では正反対の方向性を持つ。同じ一つの表現がその両者を表わすということはどういうことか。これまでの「ために」の考察と「Pで、Q」の先行研究から得た「背景」という概念を入れて、次節で考えてみる。

4.1 「ために」の場合

4.1.1 「Nのために」の場合

まず、前件が名詞の場合を見てみよう。

- 44 赤嶺冴子さん(81) …は「一日一個だけ配られるおにぎりのために炎天下、長蛇の列に並んだ」と話す。(K.2015.9.6)

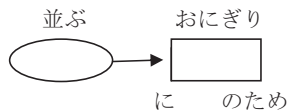
例44の「おにぎりのために」を動詞で表現すると「おにぎり((=利益)を手に入れるという「目

的」)のために」と同義である。これは「目的」の解釈の場合である。

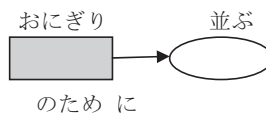
いっぽう、「おにぎり(がもらえるという「既定」の事実、事情があるからという「理由」)のために」と解釈される場合もあり、「原因・理由」の解釈が得られる。Hopper(1979)、Hopper & Thompson(1980)の言う「背景」の特徴である「他動性が低く(=「もらう」ではなく「もらえる」)」、「項が1つ」で、「新情報(=「が」のマーク)を動詞前に置く(=「おにぎり・を」ではなく「おにぎり・が」)」の3つから、「原因・理由」の場合の「おにぎりのために」は「背景」の性質があると言える。以上のことを図式で表すと次のようになるだろう。なお、網掛け部分は「背景化」されたことを示す。

図2

a: Nのために(目的)



b: Nのために(原因・理由)



4.1.2 「Vために」の場合

前件の動詞が「た」でマークされた「Vた・ために」は「原因・理由」を表し、「目的」の場合は「る」が来る。次の例を見てみよう。

45 作家Aは、社会の暗部告発のために、命を削った。

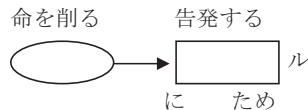
a 作家Aは社会の暗部を告発するために、命を削った。

b 作家Aは社会の暗部を告発したために、命を削った。

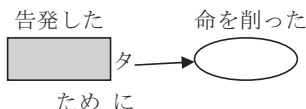
例45のaとbのイメージを図式で表すと次のようになる。

図3

a: Vるために(目的)



b: Vたために(原因・理由)



4.2 「なら」と「とき」の場合

「ために」の前に「る」が来るか「た」が来るかによって、「目的」または「原因・理由」の解釈の違いが出るとともにそれぞれが持つ方向性が逆転する様子を、図1～図3で表した。本節では、

同様に方向性の逆転が見られる別の表現をさらに二つ取り上げてみる。

46 a コピーするなら、声をかけてください。

b コピーした (な) ら、声をかけてください。

47 a アメリカへ行く時、お土産を買おう。

b アメリカへ行った時、お土産を買おう。

例 46、例 47 の a は、前件の「コピーする」「アメリカへ行く」よりも前に（つまり未完了時に）、後件の「声をかける」「お土産を買う」動作がなされる。例 46、例 47 の b では逆に、前件の「コピーした」「アメリカへ行った」後に（つまり完了以降の時点で）、後件の動作がなされることになる。前件・後件各々の継起的な動作の成立を時間に沿って並べて図で示すと図 4 と図 5 のようになる。

図 4

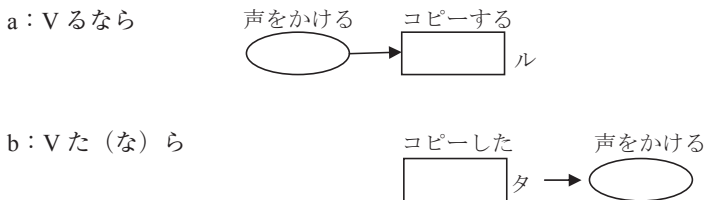
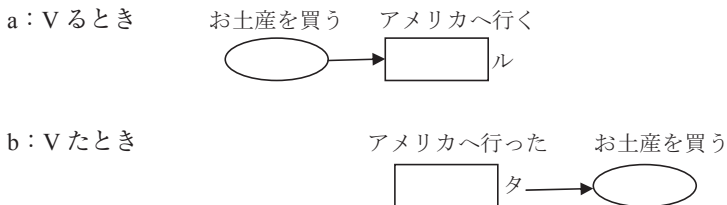


図 5

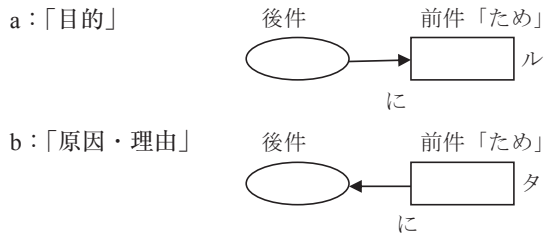


「なら」や「とき」の場合も「ために」と同様に、「未完了」「る」あるいは「完了」「た」のマークによって、前件「に」向かっていくのか、前件「から」出発するのかという逆の方向性を持つことがわかる。

5. 「ために」の「目的」と「原因・理由」の方向性

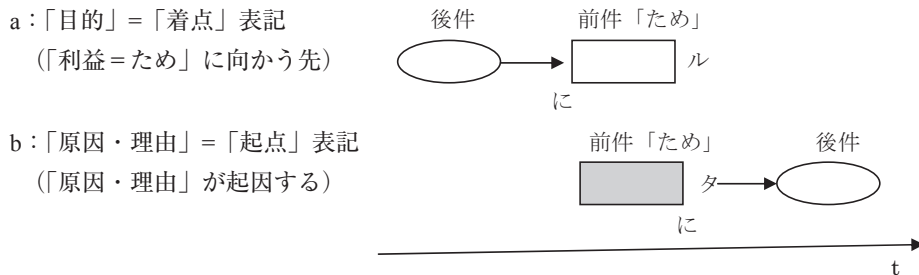
本稿の「1. はじめに」で示した図 1 の a. 「目的」と b. 「原因・理由」の方向性が正反対であることは、視点を変えれば下のような図式で描かれ、逆の方向性がより明確になる。

図 6



上の図 6 を時間の流れに沿って並べ替えると図 7 になる（下線の実線矢印と t で時間軸を示す）。

図 7



第 1 節で示した「ために」の「目的」と「原因・理由」表現での方向性の違いの問題は、時間性を考慮した視点からの図 7 で解決に至る。「ため」は元来「利益」の意味から、その利益を求めることで「目的」の表現となったと言われている。人は意志を持ってその利益を求め「目的」としてそれに向かって行動を起こす。これが「ために」の「目的」表現と言える。よって、「目的」は向かって行き着く「着点」の「に」でマークされることが理解できる。

いっぽう、前件の「完了」した事態や既定・継続の「状態」が「背景」となりそこから起因する別の後件の事態が起きる場合、前件の起因事態が「起点」のマーカー（「ために」では格助詞「に」）でマークされ、「原因・理由」表現となると捉えられる。この捉え方は、レイコフ & ジョンソン (1986: 119-120) の「あらわれ出るメタファー」(EMERGENCE metaphor) に基づいて概念化される因果関係の特殊なケースとして次のように捉えられている考察と一致する。そこでは、「出来事や活動、感情や考えを、存在物や内容物としてとらえる観方」(前掲 1986: 38) がなされており、次の例のように（絶望、疲労などの）「状態」が容器であり、行為や出来事はその容器からあらわれ出てくる物体とみなされている。

He shot the mayor out of desperation. <彼は絶望から (= して) 市長を射殺した。>

He dropped from exhaustion. <彼は極度の疲労から (= のために) 倒れた。> (前掲 1986: 120)

Lakoff & Johnson (1980: 75) では、“The CAUSATION is viewed as the EMERGENCE of the EVENT from the STATE.”、つまり、「その「因果関係」は「出来事」(EVENT) が「状態」(STATE) から「あらわれ出てくる」(EMERGENCE) というふうになされているのである」(前掲 1986: 120)。

原因・理由表現「ために」の前件がもつ「状態」性は、上例と同様に精神や感情の状態を示す形容詞や名詞に見られ、また動詞の場合でも「状態」を表す動詞や「ている／である」という形式に見られる。これらの「状態性」は本稿で考察してきたとおりである。上述したように「状態」から「出来事」があらわれ出てくるという「因果関係」の捉え方から、因果表現「ために」の「に」が“out of”や“from”と同様の「起点」を表すものであるという理解に至る。

6. おわりに

「ために」という一つ表現が、「目的」と「原因・理由」をマークする「着点」と「起点」という正反対の二つの「方向」を示すことを疑問に思ったことから、本稿ではその「方向性」を中心に考察してきた。筆者の「P-で、Q」の因果関係の先行研究の結果ともあわせて、より明確に「ために」の持つ「双方向性」を示すことができた。つまり、「目的」表現においては、後件の示す事態は「目的」に向かって進み到達目的である前件に到着するため、前件「ために」の「に」は「着点」を表す。いっぽう、「原因・理由」表現においては、後件の示す結果である事態は、前件の「状態」（を含む「背景」）からあらわれ出たと捉えられ、前件「ために」の「に」は「起点」を表すと理解される。

本稿では、「ために」が持つ二つの方向性を考察したが、方向には「前後」やさらに「上下」などもある。メタファーや「因果連鎖」などの先行研究を参考にしながら、今後さらに「因果表現」について考察を進めていきたい。

また、「ため」と「ために」では「に」のマークの有無の差はほとんどないと日本語学の先行研究では扱われてきたが、おもに新聞での実例を見ていると、「原因・理由」の場合はほとんど「ため」が使われていた。形が違えば両者の差は必ずあるはずである。著者の先行研究（1996）では「に」格の「原因・理由」表現について考察し、「に」の持つ「一体化」という性質や「で」でマークされた表現よりもより一命題的であることを述べた。「で」と「P-で」との共通性とも合わせて考えると、一命題的でより格らしい「に」とより二命題的な「で」の差が、本稿の考察の「ために」と「ため」との差につながると考えられる。「名詞修飾」での考察とも関連するが、「原因・理由」文は、「原因・理由」とその「結果」という二つの命題を示すものであるからだろう。これについては今後の課題としたい。

本稿では「原因・理由」としたが、今後は「原因」と「理由」を分けての考察が必要と思われる。考察を進める中で、「目的」か「原因・理由」か、また、「目的」は「理由」ではないかなど疑問が続いた。自然界での「原因」はもとより、人間の判断が関わる「原因・理由」について、両者を区別しての考察が必要であると考え。単文における格助詞や接続助詞、接続詞、あるいはまた文脈における談話標識などにも注目していきたい。「原因」と「理由」についてさらに考察を深めることで、人間のなす「理由づけ」が見えるだろう。残された課題としたい。

注

(1) 主語が非同一の「Xがー、Yは～」の例も下のように見られるがごく少数である。

早紀江さんは…「…。めぐみたちが帰国するために一生懸命活動している。…」と話した。

(K.2015.9.15)

この節では典型的な例についてその特徴を見ることを主眼とする。

- (2) 塩入 (1995) では、「タメニハ」の特徴は「従属節は目的を提示し、主節はその目的の必要条件を表す。必要条件は複数の選択肢を意味する。節の独立度は高い。」と見ている。
- (3) 前件が形容詞の例は本稿での直接の考察対象ではないが例を挙げておく。
米国では、…、弁の修復手術で心臓を停止させる時間が長かったため、注意を促す必要があるとしている。(A.2015.9.12)
- (4) 未完了事態であり「+既定」である例として、「そうだ、明日はテストがあった／テストだった」と「た」でマークされうる例が典型であるが、本稿では、同一表現が「目的」と「原因・理由」の二義になる例の考察から「る」表示の例が必要であるので、「た」になりうるか否かを判定材料にはできない。たとえば、先生の発言で「(今日のところをよく復習するように。) 明日テストします／テストです。」の場合では、未完了事態かつ「-既定」であり、先生の発言時が「テストがある」と認識される時点である。基本的には「想起されうる」ことが「+既定」であると考える
- (5) 益岡 (1997) は、「ため」と「ために」について、「に」を伴う場合は主張のスコープ・疑問のスコープの中に収まり、そうでない場合はこれらのスコープには収まらない」と、スコープという観点から説明づけている。
- (6) このパターンは 38 例中 20 例であり、「て」の「因果」の場合は主語が同一の場合もあると指摘した(宗田 1991:134 参照)。
- (7) 宗田 (1996) では、名詞 (句) の持つ命題性から、より単文らしい単文からより複文に近い単文について考察した。より複文に近い単文の場合は複文と同様に、談話の持つ「前景／背景」の概念に応用可能であると考ええる。

参考文献

- (1) 塩入すみ (1995) 「スルタメニとスルタメニハー目的を表す従属節の主題化形式と非主題化形式一」『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版、pp.460-467
- (2) 宗田安巳 (1991) 「継起表現『P- て、Q』と因果関係」『日本語・日本文化』第 17 号 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科、pp.129-143
- (3) 宗田安巳 (1996) 「日本語の原因・理由表現について一命題性から見た複文と単文の相互関係一」『言語探求の領域 小泉保博士古稀記念論文集』大学書林、pp.275-287
- (4) 宗田安巳 (2006) 「『で』の『格解釈のゆれ』再考―『道具』と『原因・理由』を中心に―」『言外と言内の交流分野 小泉保博士傘寿記念論文集』大学書林、pp.323-333
- (5) 前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- (6) 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- (7) HOPPER, P.J. (1979), "Aspect and Foregrounding in Discourse" *Syntax and Semantics 12 Givón (ed.)* Academic Press, 213-241
- (8) HOPPER, P. J., & THOMPSON, S.A. (1980), "Transitivity in Grammar and Discourse", *Language*, 56 (2), 251-299
- (9) LAKOFF, G. & JOHNSON, M. (1980), *Metaphors We Live By*. Chicago : University of Chicago Press. (『レトリックと人生』(1986) 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 大修館書店)

(京都大学国際交流センター・非常勤講師)

The Bidirectionality of Source /Goal in the Causality /Purpose Expressions: With Special Reference to “Tameni”

Yasumi (Yamanashi) Soda

Abstract

Japanese word “tameni” is ambiguous in that it means both <purpose> and <cause/reason>. Typically, “tameni” co-occurs with non-perfective tense marker (“-ru”) when it expresses <purpose>, while it co-occurs with perfective tense marker (“-ta”) when it expresses <cause/reason>. There are some ambiguous cases, however, in which “tameni” co-occurs with “-ru”. In the previous studies of Japanese linguistics, no attempt has been made to give a natural account of semantically ambiguous phenomena of this kind. The main objective of the present paper is on the one hand to explain this ambiguity in a natural way and on the other hand to predict the bidirectionality of source and goal in the causality and purpose expressions.

(Part-time lecturer, The International Center, The Organization for the Promotion of International Relations,
Kyoto University)